
言語研究センター共同研究

外国語学習者の言語意識

アルトゥーロ・バロン／菊田和佳子

中間言語と第二言語習得に関する我々の研究グループの2012年度の主な活動は、スペイン語学科の学生に外国語習得についてのアンケート調査を実施し、それを分析するというものだった。2012年の1月に4年生の学生を対象に行われたアンケートでは、スペイン語文法の習得の過程で困難だと感じるものは何かについての調査を行った。

その調査の結果、学生の大部分が文法の習得について強い不安を感じていること、さらに既に習得し使いこなすことができているはずの文法構造の学習についても懸念を抱き続けているということが分かった。これは、彼らの文法に対する自信のなさの現れだと言える。また、特筆すべき調査結果として、学生たち自身が難しいと判断した文法項目は、言語対照研究や第二言語習得理論の観点から日本語を母語とする学生にとって習得が困難であると分析されているものとは異なっているという点が挙げられる。学生たちは、専門家たちが難しいと考えている項目ではなく、むしろアン

ケート実施時に授業で取り組んでいた文法構造について困難を感じる傾向が強いということが分かったのである。意外なことに、冠詞や過去形の使い分け、動詞の活用、無強勢代名詞を伴う構造など、実際に学生が最も間違いやすいこうした項目は、彼ら自身は難しいとは考えていない。おそらく、1-3年次に学習するこうした項目は、4年次になると授業で詳しく扱うことがなくなるため、彼らの意識からは離れてしまうのだろう。学生の方はその時に学習している新しい構造の方に気を取られてしまうようである。

こうしたデータから分かることは、大学で第二言語を学ぶ学生は意思伝達の必要性を本気で感じないために、言語の自律した使用者となることができていないということ、そして、その言語を使用する機会が授業中のアクティビティに限られているということであろう。言語使用の機会が授業に完全に依存している状況を克服し、学生が本当の意味で自らの言語学習に向かい合うようにするには、彼らができるだけ自然な状況で自主的にそ

